

呉昌碩早期における文人的思考の考察

— 一刻印側款からの発信を通して —

A consideration about literati thought in the early period of Wu Changshuo
— According to interpretation from the phrase engraved on the stamped surface and
side of the seal carving material —

利根川 千枝子

Chieko Tonegawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：呉昌碩，文人，銘文篆刻

Key words : Wu Changshuo, Literati, Inscription of seal cutting

1. 研究目的

(1) 本研究の着想に至った経緯

私は、書・篆刻を趣味として嗜み、展覧会活動を行ってきた。篆刻作品においては、印影に加えて側款拓を添えた。側款を刻す際には、主に中国清朝の文人による側款拓を参考にした。その中で呉昌碩（1844-1927）の側款は、数多く刻印にかかわることなどが記されており、技量的・内容的にも極めて秀逸である。そこで呉昌碩の側款を学術的に捉えることに関心を有得、本研究をするに至った。

(2) 本研究の目的

呉昌碩は、詩書画篆刻に優れ四絶と称せられた「中国最後の文人」である。本研究では、呉昌碩早期の刻印側款を解釈し、呉昌碩の早期における文人的思考を考察して、その本質を明らかにすることである。

呉昌碩に関連する研究は、次のようである。親族及び近現代の学者たちによって、人と業に関する研究がなされている。また、呉昌碩の文人的側面の研究が、松村茂樹氏によってなされている。

側款に関しては、書法の分野で芸術的に観ることはあるが、視点を側款の内容に向けた研究は少ない。本研究は、側款の内面的要素に着目して、呉昌碩の文人的思考を探究することであり、学術的独自性がある。呉昌碩は、自ら篆刻第一といい、早期からその修得に専念していることから、本研究によって呉昌碩が文人として大成した要素を捉えることができる。ここに本研究の創造性がある。

2. 研究実施内容

(1) 研究方法

- i. 呉昌碩の印譜、小林斗盦編『中国篆刻叢刊』第32巻・清26・呉昌碩（一）。1981.4.二玄社。所収（呉昌碩著『缶廬印存』同著『削觚廬印存』を底本とした）¹⁾により、早期の印影184顆、それに添えてある側款拓103文を解説及び解釈した。これより呉昌碩が早期に関係した人物を特定することができた。
- ii. i.で特定した人物について、呉昌碩著・沙匡世校注『呉昌碩石交集校補』1992.3.上海書画出版（以下『石交集』と表記）²⁾で確認をして記載内容を翻字し究明した。
- iii. i.及びii.の結果を呉昌碩著『削觚廬印存』1977.12.書学院出版部（以下『削觚廬印存』と表記）³⁾と照合し確認して呉昌碩早期の交流をさらに確証した。

(2) 研究結果と考察

- i. 刻印から呉昌碩が早期に交流した人物28名を特定できた。このなかで『石交集』に記載が有った21名を掲げる。このうち下線で示した16名は『削觚廬印存』に掲載されており印影も一致した。解釈した印影の数を（）内に示した。

顧潞(1)、呉穀祥(4)、潘喜陶(3)、楊岷(2)、周作鎔(6)、方濬益(1)、林福昌(2)、金心蘭(1)、沈秉成(2)、金傑(3)、徐士駢(1)、錢國珍(1)、呉山(2)、凌霞(2)、畢兆淇(2)、呉雲(3)、陳殿英(1)、金樹本(1)、章綬銜(2)、袁學賡(2)、楊晋藩(1)

これらの人物は、多大な功績を残し後世に名を残している。刻印の内容から呉昌碩は学識を高めるために多くの文人と交際していることがわかる。

なお、解釈した印影には存在しなかったが、『石交集』に記載が有り、『削觚廬印存』に印影が掲載されている人物は、杜文瀾、費以羣である。

ii. 『石交集』の記載内容から、前述の人物との交流が見て取れる。呉昌碩は、知遇を得た収蔵家・金石家を訪ね、周・戦国時代の青銅器、秦漢時代の埴・印・書物・拓本などを鑑賞し見識を深めている。この地道な探究が、古き良き物を修得し篆刻に応用し、文人として開花する基盤であることが窺える。また、当時一世を風靡した画家たちと関わり、彼らを敬愛し彼らの作品を求め、謝礼に自らの刻印を提供している。まさに、呉昌碩の刻印が、交友を深める媒体となっていると言える。

iii. 呉昌碩の早期刻印の側款には、どのような志向でその印を刻したのであるかを記しているものがある。それについて記したものを分類して挙げる。複数あるものは、その数を()内に示した。

- a. 兩雷軒攷藏金石文字(2)
- b. 古陶器文字如是. 仿陶拓刻
- c. 擬漢埴文(2). 舊藏漢晉埴甚多 性所好也~摹刻
- d. 仿漢(2). 得漢銀印法. 仿漢鑄印
- e. 仿漢碑額篆
- f. 擬穿帶印
- g. 仿簠齋藏印. 樵古
- h. 仿錢耐青. 仿完白山人. 讓老有此法

これらの側款から、次のようなことが解る。a.からは、前述の呉雲(1811-1883 室号 兩雷軒)が所蔵する青銅器に鑄込まれている金文を倣って刻している。これより、呉昌碩が呉雲と交流してここで遺物を鑑賞していることがわかる。b.からは、古陶器に焼成された文字を倣って刻している。c.からは、漢晋代の埴(甃)に焼成された文字を擬えて刻している。旧蔵している漢晋埴はかなり多く、生まれつき好み、まねて刻している。古陶器や埴に記された文字態を取り入れて自身の芸術に吸収していることが窺える。当時において古陶文字や埴文字を篆刻に用いた例は未だなく、呉昌碩が初めてであると思われる。現代篆刻においても稀有であると思われる。これは、呉昌碩が埴をとりわけ愛好していたから必然の事象とも言える。また、呉昌碩の芸術に対する感性の鋭さと先駆性の高さが窺える。d.は、漢印に倣って刻している。その例は他の刻印と比較して多い。これは、呉昌碩に篆刻の基本は漢印であるとの認識があると推察される。e.は、漢代の石碑上部に書かれた篆書に倣って刻している。f.の穿帶印は、主に漢代に用いられたも

ので、上下二面に刻され側面に穴を開けて紐を通し腰に下げる印である。この印の形式に擬えて両面を刻している。ここでは、穿帶印から構想を取り入れたことがわかる。g.からは、金石学者陳介祺(1813-1884 号 篋齋)の所蔵する印を倣って刻している。これは陳介祺との関わりがありそこで鑑賞したからであるといえる。樵古は、「古を樵す」という意である。h.からは、各篆刻家、錢松(1818-1860 号 耐青)、鄧石如(1743-1805 号 完白山人)、呉讓之(1799-1870 讓老)に倣って刻している。古代遺物ばかりでなく、清代の偉大な篆刻家の作品からも修得する謙虚な姿が見える。このように、側款の内容からも、古代遺物に学ぶと共に、知識人との交流によって研鑽を重ねて、學術の修得に労を惜しまない呉昌碩の姿が窺える。

3. まとめと今後の課題

小さな印材に刻された側款は短い文言であるが、大きな情報を発信している。そして呉昌碩の刻印時の状況と心情を今に伝えている。今後は、さらに、この側款の情報を活用し資料を補い検討を加えて、これまでに得たこととあわせて考察を深め、修士論文を執筆したいと思う。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

松村茂樹 利根川千枝子 他 5 名 シンポジウム
「近代アジア太平洋文化の諸相」報告『人間生活文化研究』 査読無し (投稿済み)

②学会発表

松村茂樹 利根川千枝子 他 5 名 シンポジウム
「近現代アジア太平洋文化の諸相」 2022.11.28.
大妻女子大学 (東京都千代田区)

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和4年度研究助成(課題番号 DB2225)「呉昌碩早期における文人的思考の考察—刻印側款からの発信を通して—」を受けたものです。

主要参考文献

- [1] 小林斗盦編『中国篆刻叢刊』第32巻.清 26.呉昌碩(一). 1981.4. 二玄社
- [2] 呉昌碩著. 沙匡世校注『呉昌碩石交集校補』1992.3. 上海書画出版社
- [3] 呉昌碩著『削觚廬印存』1977.12. 書学院出版部